

礼文・利尻島編年の新検討 — その (3) 亦稚貝塚から沼浦海水浴場遺跡へ —

柳澤清一

〒 162-0041 東京都新宿区早稲田鶴巻町 513 早稲田大学総合研究機構 先史考古学研究所

A New Consideration of the Pottery Chronology of Rebun and Rishiri Islands Pt.3: From the Matawakka Shell Mound to the Numaura-kaisuiyokujo Site

Seiichi YANAGISAWA

Institute of Japanese Prehistory, Comprehensive Research Organization of Waseda University,
Nishi-waseda, Shinju-ku, Tokyo, 169-8050 Japan

Abstract. Detailed comparative analysis was conducted on pottery excavated from Matawakka shell mound and Numaura-kaisuiyokujo site. As a result, the effectiveness of the pottery chronology of Rebun and Rishiri Islands given in the previous paper is reconfirmed, and a draft of the chronology which extends it to the next period is presented.

はじめに

柳澤 (2017, 2018a) では、礼文・利尻島で支持されている通説編年とその年代観を見直し、B-Tm 降下年代を利用して、擦紋Ⅱ (並行) 期の島嶼域・道央編年を仮設した。本稿では同様の視点から、仮設した編年が擦紋Ⅲ (並行) 期 (佐藤, 1972) でも成立するのかどうか、その点に的を絞って検討したい (図1)。

1. 問題点の所在

オホーツク海南岸地域の古代土器編年をまとめた熊木 (2018) において、本論と関連する部分の編年を編成すると、図2上段のようになる^(註1)。筆者の編年 (柳澤, 2015, 2018a) では、「刻文期前半」の2~5例は、ほぼ9世紀後半に比定される。熊木氏の年代観と比べると、その差は200~300年に達する。また前半期2~5例は「北大式E期」(1)に、そして後半期8~11例は、「塚本編年1期」・「北大式F期」に並行するという。しかしながらどの標本例についても、礼文・利尻島内の同一層で確実に共伴したという事例

を、筆者は寡聞にして知らない。標本とされた「刻文土器」と「北大式」、そして土師器の同時性が捉えられないとすれば、別編年の可能性をあらためて探る必要があるだろう。

1. 香深井1(A)遺跡
2. 元地遺跡
3. 種屯内遺跡
4. 亦稚貝塚
5. 沼浦海水浴場遺跡
6. K435遺跡
7. 青苗砂丘遺跡



図1. 本稿で検討する資料の主要遺跡。

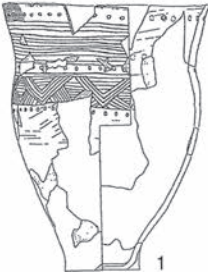






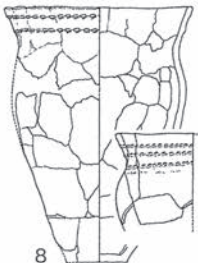




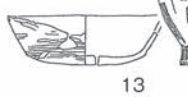

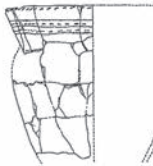





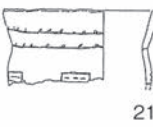

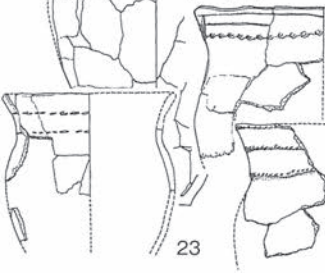


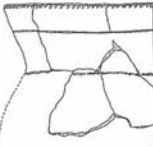
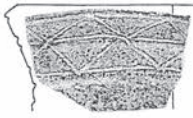


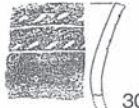

	続縄文・擦文	オホーツク	
		時期区分	
		刻文期前半	刻文期後半
		北海道北部	北海道東部
6世紀後葉～7世紀前葉		 	 
7世紀中葉	 	 	 
7世紀後葉	  	  	   
香深井1(A) 1号a 竪穴	   	     	

図2. 熊木(2018)による通説の北方編年案(熊木(2018)より編成)と香深井1(A)遺跡の参照資料。

そこで、「刻文期後半」標本の8:22例に注目して検討したい。本例は、1号a 堅穴「床面」出土とされている。しかし実査では、床面と床面直上の破片が接合したものと確認された^(註2)。24・25例は「床面」資料であるが、23例は「床直上」である。また「埋土」と記載された26～31例については、つぎのとおり出土情報を確認している。

- (1) 26: 埋土・床面 (G12区 4905:7/3, 4920:7/4)
- (2) 27: 床面直上 (G12区 4909:7/3)^(註3)
- (3) 28: 床面直上 (G13区 8040:7/5)
- (4) 29・30: 床面直上 (G12区 2987:6/21)^(註4)
- (5) 31: 「埋土」(H12区 2529:魚骨層II-6/16)

以上のとおり、道北の「刻文後半」とされた標本例は、「床面」とその「直上」に跨って検出されている。したがって8例や22～24例、26～30例などは、時期的に近接したものと考えられる。型式学的にも、矛盾する点は特に認められない。

したがって、道東「沈線文期」(前半)の19・21例や、1号a 堅穴の27～30例のように、「東多来加式」(伊東, 1942)に似た「刻紋・沈線紋」の扱い方を示す資料は、8例に対比された道東「刻文期」の10例よりも新しいと認められる。また古手の26例や27・28例は、1号a 堅穴土器群が刻紋・沈線紋土器期(「沈

線文期」)に属し、道東の刻紋土器Bに並行することを示している。ちなみに筆者は22～28例などを、夙に刻紋・沈線紋土器の(1)類に比定している。また、「沈線文期」(前半)標本の19・21例を(2)類とし、それに対比された15～16例を(3)類とする10細分案を発表している(柳澤, 2015:285-290, 336-337, 351-355, 365-368)。

この細分案によれば、道北の「刻文土器」と「沈線文土器」の編年(熊木, 2018)には、同時性の認定に関して少なからず混乱があると認められよう(柳澤, 2015:361-368)。したがって、それに対比された「北大式E-G期」にも、自ずと編年上の齟齬が伏在していると考えられる。「刻文期」と「沈線文期」(前半)の標本例は、はたして「北大式」に並行し、7世紀代に比定されるものであろうか。こうした年来の疑問を解く前に、柳澤(2018b)で仮設した広域編年案の要点を確かめておきたい。

2. キメラ(折衷)土器による擦紋II(並行)期編年

刻紋土器の中にキメラ(折衷)土器が存在することは、以前から指摘しているとおりで^(註5)。亦稚貝塚では、図3の1・2・5・8例が出土している。5・8例は報告されているが、1・2例は未発表の資料である。

少し観察すると、1・2・8例の胴部には3～4本

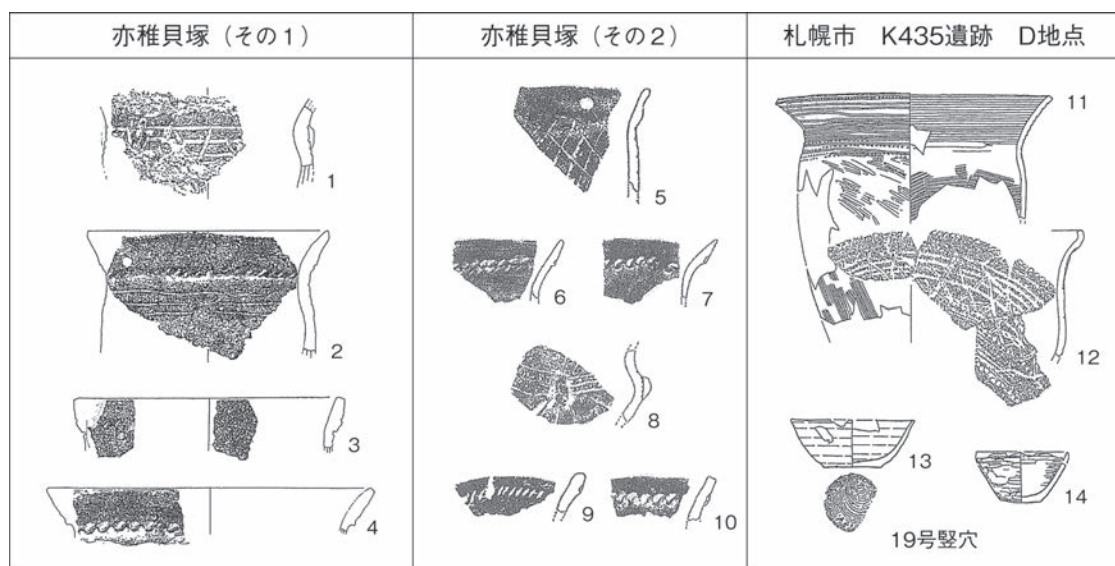


図3. キメラ(折衷)土器から見た亦稚貝塚と札幌市 K435 遺跡出土土器群の対比。

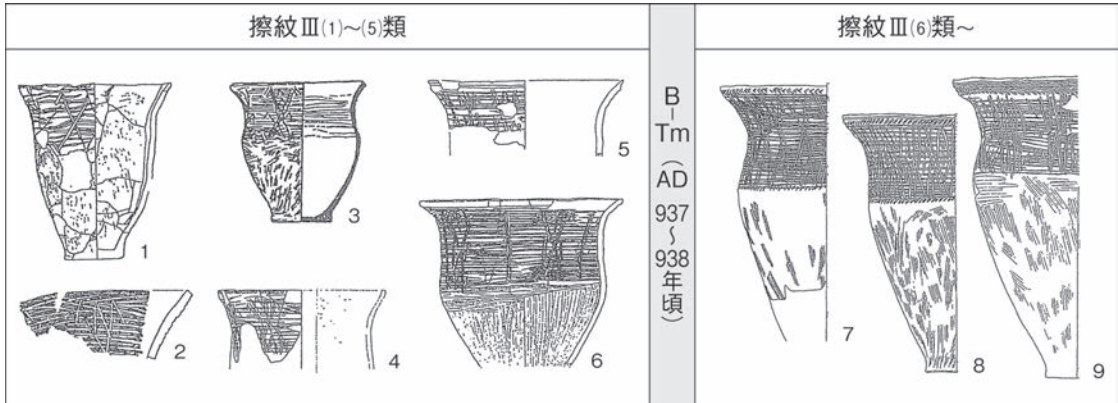


図4. 道央における擦紋Ⅲ期に比定されるB-Tmの位置。

の横走沈線紋が引かれ、1・5例には、さらに鋸歯状紋が施されている。どちらの要素も道央の擦紋Ⅱ(11・12)には一般的であり、両者の同時性が認められる。他方、1例や8例に見えるポッチは、刻紋土器Aに特徴的な要素で、アムール川中流域にも存在する。これはどこでも短期間に用いられており、広域的な同時性を捉える手掛かりになる。

図示した資料の出土状況を見ると、1例には3例が伴い、2例は4例と出土している。5例や8例もまた、6・7・9・10例と検出されており、以上の資料は、キメラ(折衷)土器を根拠として札幌市のK435遺跡D3地点19号竪穴の土器群(11~14)に並行するか、または近接するものと考えられる。

道央では一般に、11~14例のような土器群の年代は9世紀後半に比定されている。したがって、「刻文期」(前半・後半)の年代は7世紀代ではなく、遙かに新しく9世紀後半まで降る可能性が想定される。それでは、その後の時代においても、以上の観察と矛盾しない編年案が仮設できるであろうか。

3. 擦紋Ⅲ(並行)期編年の検討

この時期には、土器型式編年の編成に役立つ火山灰(B-Tm)が知られている。石狩低地帯の擦紋期の調査では、つねに特別な注意が払われており、すでに精細な所見が数多く報じられている。

1) 道央における擦紋ⅢとB-Tmの関係

擦紋Ⅲの口頸部には一般に、親縁関係にあるモチー

フが幅広く施される。「X」字・鋸歯状・針葉樹状のモチーフなどが目立つ。それらの変遷をB-Tmも参照してたどると、ほぼ10単位に細分されるように思われる。B-Tmは(5)・(6)類間で検出されることが多い(柳澤, 2015: 398-400)。あらためて、その前後に編年される擦紋Ⅲを示すと、図4のようになる。1~9例の擦紋Ⅲが利尻島内において、広義の「オホーツク土器」に繰返し伴うならば、両者は同時代に存在していたと捉えられよう。それでは、ここで亦稚貝塚を離れ、天塩から遙かに小平・留萌・増毛方面を望む東海岸の遺跡へ移動

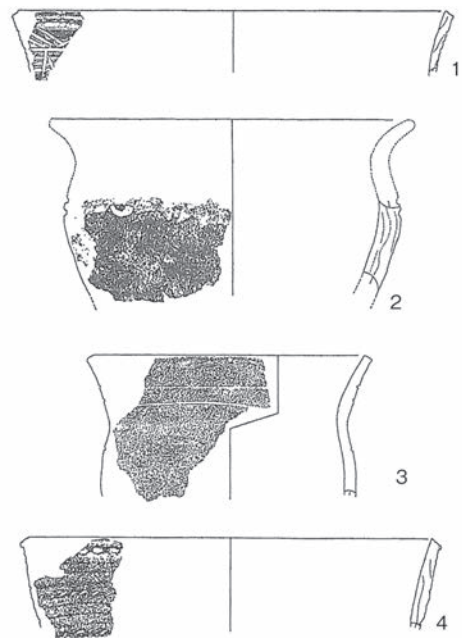


図5. 沼浦海水浴場遺跡A1区US1の土器群。

したい。

2) 沼浦海水浴場遺跡における出土事例の検討

この遺跡では、2016 年以来 3 回の発掘調査を実施している。ここでは、1・2 次の資料から擦紋Ⅲの出土例を選び、層位・型式の両面から検討したい。

A1 区 (第 1 次)

本区は旧番屋跡に位置している。上層では近現代遺物を混出するが、深くなるにつれて安定した文化層となる。ただし、どの層群でも古い土器片を伴出する。その点は各区で共通しており、実査した亦稚貝塚・種屯内・香深井 1 (A) 遺跡でも変わらない。

A1 区 (図 5) で注目されるのは、表土・耕作土・攪乱層にあたる第 1 層群において、近現代遺物とともに出土した土器群 (1～4) である。近似の資料は、その直下の US4 にも含まれている。本層から二次的に遊離したものを含んでいると推定される。両層の出土土器は、刻紋・沈線紋土器 (3)・(4) 類の範囲に収まる。US1 では、これに厚手の元地 2 式 (2) や擦紋Ⅲ (1) を含んでいる。どちらも刻紋・沈線紋土器に伴うものと思われる。そのように捉えても、他の調査区の見所と矛盾しない。

B1 区 (第 1 次)

本区には B1a 区から続く攪乱部分があるが、A1 区に比べると、遙かに良好な出土状況が層位的に認められる (図 6)。

表土 (第 1 層群) 下では、小規模な砂層と貝層が互層をなしており、刻紋・沈線紋土器の古手のものからソーメン紋土器までの変遷が、層序に沿って「8 例 → 6・7 例 → 5 例 → DK2 (土壙 2) の構築 → 切り込み面の壁際：1 例」という流れで捉えられる。

7・8 例は、刻紋・沈線紋土器の (2)～(3) 類に比定される。6 例の擦紋Ⅲも、その頃と見做して矛盾しない。元地 2 式は、熊本 (2018) の編年案 (熊本, 2018: 図 86) によると、ソーメン紋土器を母体として「10 世紀前葉」に現れるという。しかしながら本区では、ソーメン紋土器 3 の 1 例よりも、遙かに下層から 9 世紀終末～10 世紀初頭の擦紋Ⅲ (6) が検出されており、明白に矛盾していると思われる。

そこで亦稚貝塚に戻り、未発表の資料を参照すると

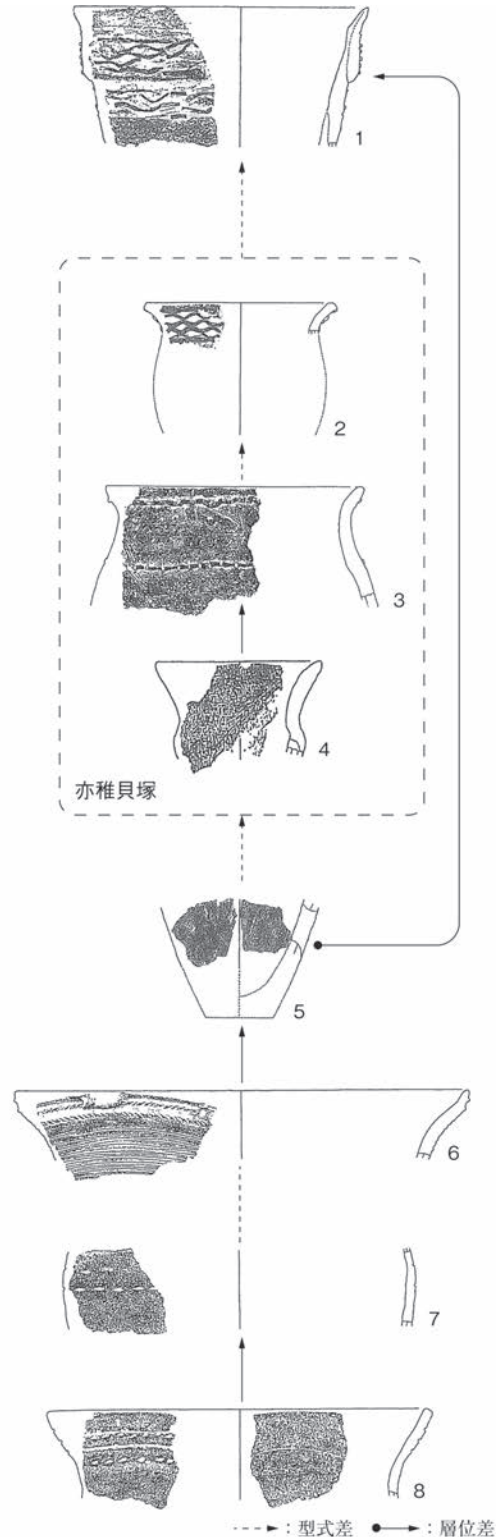


図 6. 沼浦海水浴場遺跡 B1 区・亦稚貝塚 I 区における層位出土事例の関係。

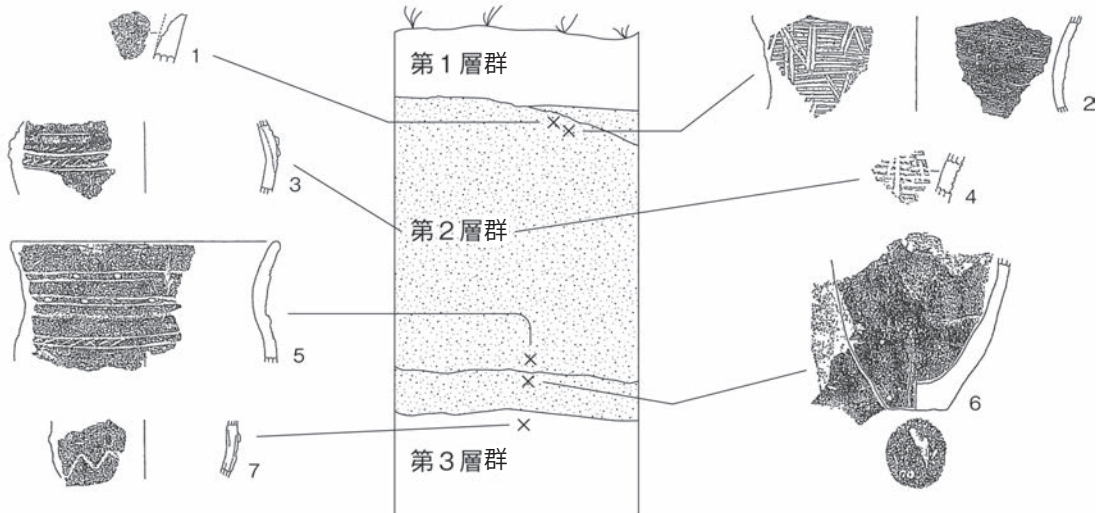


図7. 沼浦海水浴場遺跡 B0 区第 2 層群出土の土器群 (模式図).

(柳澤, 2018b), I 区において, B1 区と整合する出土状態が捉えられる^(註6).

- (1) I42 (上部) : 厚手の元地 2 式 (4)
- (2) I41 : 中厚手の擬縄貼付紋土器 (3)
- (3) I41 : 古手のソーメン紋土器 (2)

厚手の元地 2 式が刻紋・沈線紋土器に伴うことは, B1 区と A1 区の所見から認められる. 擬縄貼付紋土器からソーメン紋土器への層位的な変遷に関しては, 夙にモヨロ貝塚「貝塚トレンチ」の調査(1947・48年)で確認されており(柳澤, 1999b), これを根底から覆す調査事例は, これまでに報告されていない.

したがって, B1 区の層位事実と I 区における所見は矛盾しないと考えられる. そのとおりならば道北でも, 矢印で示したように土器群は以下の順序で変遷していることになろう.

- (1) 刻紋・沈線紋土器 (擦紋Ⅲ並行) (6, 7・8)
= 道東の刻紋土器 B
- (2) 元地 2 式 (4)・(5), 刻紋・沈線紋土器
= 道東の刻紋土器 B
- (3) 擬縄貼付紋土器 (3)
- (4) ソーメン紋土器 (2 → + → 1)

B0 区 (2 次)

本区は, B1 区における層位的な出土状況の追認をめぐり, 東隣に設定したものである. B1 区と同様に小規模な貝層と砂層が互層をなし, 斜面堆積している様子

が観察された. それを一枚単位で正確に剥離することは, なかなか困難であった. その結果として, 一部で複数層を混同していた疑いがあり, 遺物が若干混交している可能性が認められた. そこで, 礼文・利尻島調査の会(2018)では, 安定した下部層と表土の間を一括して, 便宜的に第 2 層群として扱っている(図 7).

さて, 第 2 層群の資料は大きく三つに分けられる. 一つは調査の最終段階で, 壁面の上部と下部から抜き取ったもの(1・2, 5・6)で, もう一つは, それらの中間で出土したもの(3・4)である. その組成は以下のとおり, A1 区と B1 区に良く似ていると認められる.

- (1) 上部 1 : 元地 2 式, 2 : 擦紋Ⅲ (古)
- (2) 中間 3 : 刻紋・沈線紋土器, 4 : 擦紋Ⅲ (古)
- (3) 下部 5 : 刻紋・沈線紋土器, 6 : 元地 2 式

先のソーメン紋土器を検出した DK2 (図 6-1) の土壇は, 第 2 層群を切り込んで構築されている. したがって層位的には, 上記の(1)～(3)類よりも新しいと認められる. 他方, 先に参照した最新の編年案(熊木, 2018 : 図 86)に拠れば, 厚手の元地式はソーメン紋土器を母体として登場したと認められている. しかしながらその元地式は, B1 区・B0 区ともにソーメン紋土器より下位の第 2 層群から, 擦紋Ⅲを伴って検出された. この出土状況は, 浜中 2 遺跡の層位事実と一致している(柳澤, 2013 : 154-158).

さて, 以上に観察したとおり第 2 層群では, 各区と

もに刻紋・沈線紋土器を主体とし、元地2式や擦紋Ⅲ(古)が伴出するという出土状況が確認された。

4. 沼浦海水浴場遺跡編年と通説編年の比較

一般に道東・道北の通説編年では、目梨泊遺跡の調査所見(佐藤, 1994)が尊重される。しかし、その編年案のルーツは学史上どこに求められるのか。また、学史的にどのような意義を有するのか。そうした疑問に係わる論点は、柳澤(1999b・2008:16-31)で示してきた。

1) 「忘失」された児玉のモヨロ貝塚編年とは

1947年に実施された東大・北大関係者によるモヨロ貝塚合同調査の成果は、新聞や講演会を通じて、また概説や啓蒙書によって速やかに伝えられた。なかでも、戦前からモヨロ貝塚の調査に携わっていた児玉作左衛門は、大場利夫に人工遺物の分析を託し、人骨の分析を伊藤昌一に委ねて、人類学・考古学の成果を統合する観点から、熱心に啓蒙活動を展開したことは、広く周知されていることと思われる。

しかしながら大場の戦前の研究成果を引用しつつ、概説書『モヨロ貝塚』(1948年刊)に示された画期的な編年研究の成果、すなわち「貝塚トレンチ」の層位編年を、大場の整理資料と河野広道保管の枝幸資料をもって、早々と提示していることは(註7)、大方に認知されていないようである。

図8に再掲した資料は児玉作左衛門・大場利夫・名取武光、そして河野広道ら北海道研究者の北方編年観(1947~1948)を象徴的に示す貴重な土器標本であると考えられる。名取・大場編年の発表は1964年であるが、紙幅の制約があるなかで辛うじて図化された11~17例は、そのまま児玉が提示した「モヨロ貝塚1948年編年」の標本例(1~10)と、型式学的に合致している点に注目したい。

これは偶然のことではない。そのように1947年の「貝塚トレンチ」調査において、その後の北方考古学を主導すべき北方編年の基本秩序、すなわち「砂層の土器群: 1~4 = 11・12」→「貝層及びそれに対比される土器群(13 ≒ 5・6, 15・16 ≒ 7)」→「黒土層の土器群(17 ≒ 8~10)」という序列が確認され、

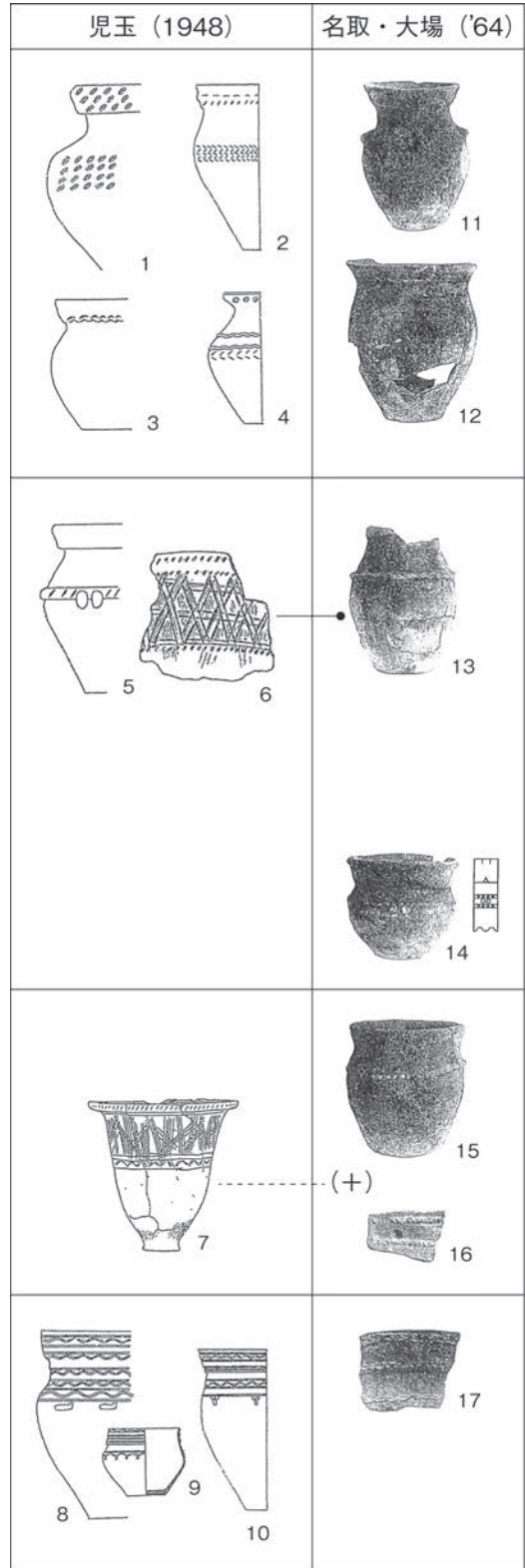


図8. 児玉1948年編年と「貝塚トレンチ」編年の対比。

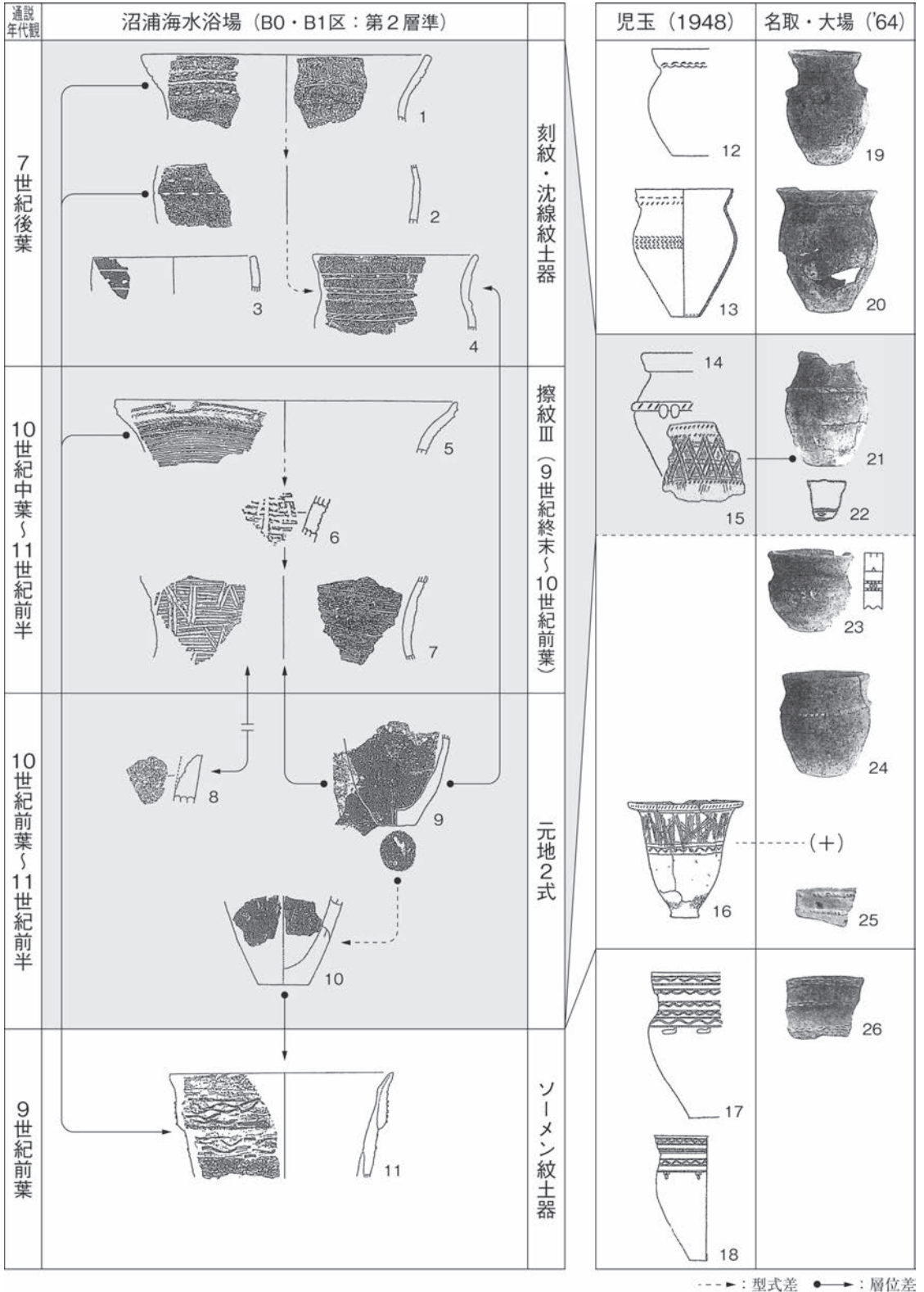


図9. 沼浦海水浴場遺跡第2層群土器に対する通説の年代観と「モヨロ貝塚 1948年編年」の対比。

その編年を示す標本例が漏れなく提示されたと理解されるのである。

なかでも、間層の砂層を挟んで2～3枚か、それ以上に分けられるとされた「貝層」において、「破片」ながら「擦紋式土器」が伴出したと児玉は明確に述べている(児玉, 1948: 12・17-22)。擦紋Ⅲと刻紋土器Bのキメラである6例は、その「擦紋式土器」、すなわち「モヨロ貝塚発掘破片」として、概説書に例示されたものである。5例は、貝層下縁出土の13例に略対比される。6例も擦紋Ⅲの古手であり、これらの時期は近接している。他方貝層の上位では、埋葬人骨の副葬品14・15例を挟んで、6例に続く擦紋Ⅳが出土しているようである。未発表資料にはそれに近似の資料2点があり、まさに「北見枝幸出土」の「擦紋式土器」7例に対比される。特に遠方の完形品が図示されたのは、単なる偶然ではあるまい。

貝層の形成が終わると、モヨロ貝塚では擬縄貼付紋土器(16)を母体として、ソーメン紋土器(8～10, 17)が登場する。それは擦紋Ⅲのキメラ(折衷)土器6例から見ると、遙か後代のことである。

以上に復元した児玉による「モヨロ貝塚1948年編年」の意義は、「諸般の事情」によって、山内博士と佐藤達夫の発言(山内・佐藤, 1964, 佐藤, 1964a・b)とともに、研究者の脳裏から失われていく。旧稿において、年来「忘失」としてきた所以である(柳澤1999b: 93-94)。

通説では、専ら「擦文前期」(宇田川, 1970)にソーメン紋土器を対比しているが、これは「モヨロ貝塚1948年編年」の秩序に照らした場合、いったいどの層序に収まるのであろうか。

2) 沼浦海水浴場遺跡第2層群の編年

沼浦海水浴場遺跡のA1区の表土層(US1)を除いて、層位的に確実なB1区とB0区の資料を種別ごとに配列し、その相互の関係を出土層と抜き取りの位置に基づいて示すと、図9の1～11例ようになる。やや複雑な表現になっているが、同じ層群内で刻紋土器に対して、厚手の元地2式と擦紋Ⅲ(古)が伴出し、その後、土壙に伴ってソーメン紋土器が検出される、という出土状況があらためて確認されよう。

それに対して左列の年代観を対比すると、7世紀の後葉から9世紀前葉を経て11世紀の前半まで、年代の齟齬を伴いつつ350年前後に及ぶことが分かる。ソーメン紋土器(11)は通説で9世紀前葉に比定されており、1～4例と5～7例の間に位置づけられる。これは明らかに沼浦海水浴場遺跡の層位事実と矛盾する。通説の編年観や年代観は、はたして道東において地域的に成立するのであろうか。

3) 「モヨロ貝塚1948年編年」の位置づけ

そうした年来の疑問を解く「鍵」は、やはり北方考古学の原点をなす、モヨロ貝塚の資料に求められる。図9の右側は、先に復元した北海道研究者の1948年編年である。沼浦海水浴場遺跡の第2層群編年の1～10例は、トーンで示したとおりに貝層下縁の21例、近接して出土したと推定されるキメラ(折衷)土器の15例、21例と同時期の14例、それに22例に対比される4例などから、ほぼ並行するか、又は近接する関係にあると考えられる。年代的には擦紋Ⅲ(古)の5～7例と、キメラ(折衷)土器15例が略対比されるので、幅を持たせて9世紀終末から10世紀の前葉の頃と捉えられる。

熊木(2018)の編年によると、ソーメン紋土器(11・17・18, 26:黒土層)は、「9世紀前葉」(宇田川編年「前期」の古い部分)とされている。したがってその位置は、貝層の土器群(21～25)よりも古く、キメラ(折衷)土器の15例以前に求められることになろう。

熊木(2018)によれば、15例の口縁部は「モヨロI群b2類」に相当し、年代は7世紀中葉に比定される。北海道研究者の「モヨロ貝塚1948年編年」では、先に触れたように、刻紋土器A(12・13, 19・20)の時期に当て嵌まると思われる。しかしモヨロ貝塚の層位事実によれば、ソーメン紋土器は砂層の刻紋土器Aから貝層土器群を経て最後に登場する。はたしてその標本例17・18・26を通説の年代観に合わせて、刻紋土器Aの時期に挿入できるであろうか。

そうした編年上の著しい矛盾を避けるには、児玉や名取・大場らによる北海道研究者の「モヨロ貝塚1948年編年」(砂層→貝層→黒土層)を受け入れ、あらためて道央・道南と道北・道東を整合的に結んだ

編年を体系的に構築する必要があると思われる。

5. B-Tm とキメラ (折衷) 土器から見た道北・道東・道南編年の対比

道東も加えたこれまでの検討から、島嶼域と道央の同時代関係については、前稿と矛盾しない所見が得られた。そこで道南の奥尻島へフィールドを移し、周知された島嶼域と道東資料の上限年代について、層位と型式、B-Tm 年代の面から検証しておきたい (図 10)。

奥尻島の包含層や竪穴住居址・埋土中には、B-Tm より古いとされた資料が報告されている。それらは年代順に大きく 4 類に細分される。

- (1) 栗圃式に対比される模倣土器と北大式・「十和田式」(伊東, 1942, 11, 9・10)
- (2) 刻紋土器 A に比定されるもの(5～8)。5 例は、十和田式の新しい要素を転用したキメラ (折衷) 土器と考えられる。6 例と 7 例は、おそらく「東多来加式」(伊東, 1942) の「古い部分」の影響を受けており、一種のキメラ (折衷) 土器と考えられる。
- (3) 刻紋・沈線紋土器期の古手に比定されるもの(2・3)。これらは底部の 4 例とともに、「東多来加式」の「新しい部分」や刻紋・沈線紋土器の古いものに似た特徴を持つ。
- (4) 刻紋・沈線紋土器期の古手に比定されるもの
 - (1). 東多来加式の「新しい部分」と共通するモチーフの扱いが認められる。

他方、利尻島の亦稚貝塚でも、大略上記の (1)～(3) 例に対比される 20・21 例, 22・23 例, そしてキメラ (折衷) 土器の 24・25 例などもある。またそれらに先行する 21 例なども出土している。他方、1 例に近似するものは見当たらない。後続する例は第 2 ブロックで検出されている^(註8)。

このように観察すると、沼浦海水浴場遺跡第 2 層群の土器群 (12～19) は、どの分類にもほぼ該当しないように思われる。年代的には、(2) 類の 2～4・20・21 例直後に位置づけられる。青苗砂丘遺跡の最新資料 1 例に並行するものが最も新しい。全体として、ほぼ (2)～(4) 類までの資料を含むと思われる。

したがって、B-Tm 下の (4) 類:1 例と (2)～(4)

類:12～19 例は B-Tm が降下する以前、すなわち AD937～938 年 (福沢ほか, 1988) より古いものと捉えられる。そのような理解のもとに、再びモヨロ貝塚へ移動したい。図に示した 28～30 例と 31～34 例は、学史上に知られた 1947・48 年の調査資料である。今では「忘失」されているが、通説編年から正しく編年できるであろうか。そこで仮設した島嶼域編年とモヨロ貝塚資料を対比してみたい。


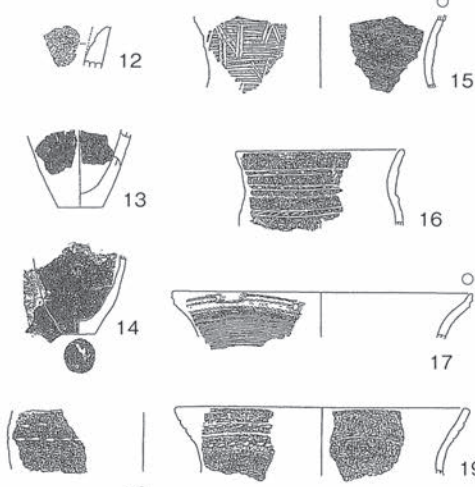
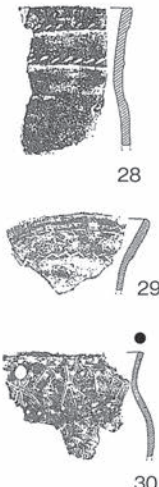
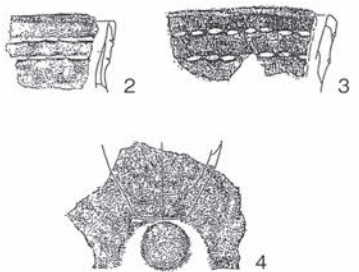
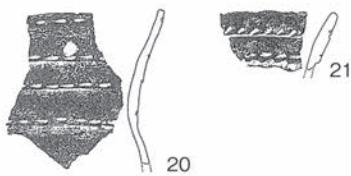
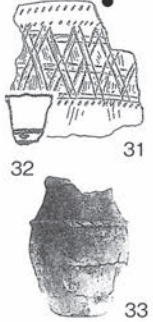

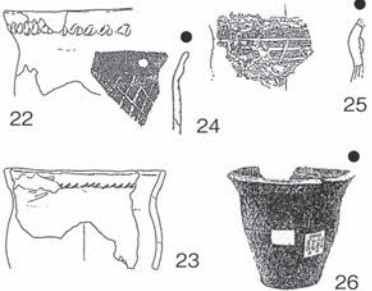

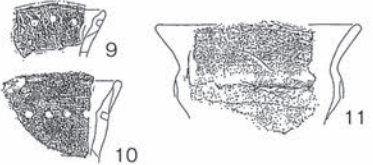

その「鍵」となるのは、児玉のキメラ (折衷) 土器 31 例である。擦紋Ⅲと刻紋土器 B (33) の古手が折衷されており、その同時代性は疑いない。沼浦海水浴場遺跡の 15・17 例は、31 例とごく近い時期に比定される。佐藤達夫が紹介した 30 例 (佐藤, 1964b) も、擦紋Ⅲ (古) と刻紋土器 B を折衷したキメラ (折衷) 土器と考えられる^(註9)。28・29 例は、それに伴出した資料であり、これらは西北貝塚の貝層から出土している。29 例は沼浦海水浴場遺跡の 19 例に、また 32 例は 16 例と近接するものである。そのように対比すれば、モヨロ貝塚のキメラ (折衷) 土器 2 点 (30・31) とその伴出土器が、B-Tm 以前に位置することは、自ずと容易に了解されよう。

さて、「擦紋系の沈線」(佐藤, 1972:482) を持つ 30 例 (≒ 31 例) と 28・29 例を、佐藤が何故に選択し、山内博士の新北方編年説 (山内・佐藤, 1964, 柳澤, 2015:27-48) と同時に発表しているのであろうか。その点を広い視野から、通説を離れて読み解くと、知られざる環オホーツク海域を一望した佐藤の北海道島編年 (佐藤, 1964a・b・1972) の奥深さに気づき、少なからず驚きを感じるのである (柳澤, 1999b:93-94, 2008:67-68)。

おわりに

沼浦海水浴場遺跡の調査は 2019 年度も予定されている。2018 年度の 3 次調査では、通説の環オホーツク海域編年の見直しに繋がる貴重な遺物が検出された。他方、亦稚貝塚には、なお未発表の興味深い資料が数多く残されている。

両遺跡のあいだを往還しながら、礼文・利尻・奥尻を結ぶ島嶼域編年の精度を高めるために、今後とも資料の分析につとめたい。

通説年代	奥尻島	礼文・利尻島	モヨロ貝塚 ('47-'48)
B-Tm (AD937~938年頃)			
7世紀後葉~11世紀前半	 <p>1</p>	 <p>12 13 14 15 16 17 18 19</p>	 <p>28 29 30</p>
7世紀後葉	 <p>2 3 4</p>	 <p>20 21</p>	 <p>31 32 33</p>
6世紀後葉~7世紀前半	 <p>5 6 7 8</p>	 <p>22 23 24 25 26</p>	 <p>34 35</p>
5世紀~6世紀中葉	 <p>9 10 11</p>	 <p>27</p>	

○：捺紋Ⅲ ●：キメラ(折衷)土器/模倣土器

図10. B-Tm 降下以前の奥尻島・礼文島・網走方面の土器群。

謝辞

本稿で引用した亦稚貝塚の資料は、利尻町立博物館にて実査し、再整理したものである。資料の利用については、佐藤雅彦氏より格別なるご配慮をいただいた。また本稿の通読と校正は長山明弘氏にお願いした。末筆ながらお二方にお礼を申し上げます。

註

- (1) 図2上段の編年図表は、熊木(2018)に掲載された編年表(図86)をもとに、本文および引用文献(塚本, 2007)の該当標本例を適宜に選択して、抄録的に編成したものである。
- (2) 8例は報告書の第47表によると、G12区から検出されている(1969年度)。接合ないし同一個体の内訳は、次のように確認された(実査:2007年4月~2008年3月)。2961:床面(6/18), 2987:床面(直上)(6/21), 2988:床面(直上)(6/21), 4909:床面直上(7/3), 4926:床面(7/5), 4929:床面(7/5)。以上のとおり、8例は床面・直上の双方から出土したと認められる。報告では、「直上」の資料を「埋土」扱いしており、「床面」・「直上」・「埋土」の扱い方は一致していない。
- (3) 27例は筆者が再採拓した資料である。刻紋と沈線が併用されており、口頸部には上下に分割された菱形連紋が施されている。類似の紋様は南千島にも見られる(平光, 1929)。佐藤達夫は「東多来加式」との関連を想定し、「南貝塚式」に対比している(佐藤, 1972)。本例が28例とともに22(=8)例と同期するか、又は近接するならば、「東多来加式」と「南貝塚式」は、熊木(2018)の「刻文期」(後半:7世紀中葉)に対比される。ちなみにサハリン島における両式の年代は、「11世紀後半~12世紀前半」に比定され、「刻文期」の後半からは400年余りの年代差が見込まれるという(熊木, 2018:図86)。
- (4) G12区2987例2件の遺物カードを参照すると、「層位 床面(直上)」とあるが、その欄の右隅には、「1号a床面」・「埋土」・「床」と鉛筆で記載され、それぞれが棒線と●(塗りつぶし)で訂正され、最終的には「埋」と記入されている。なぜこのように2987例の層位認定が四転したのかは不明である。「床面」の完形品に「直上」の資料が含まれている、あるいは接合していることに照らして、1号a堅穴資料の扱いには注意を要するといえよう。
- (5) 北方編年におけるキメラ(折衷)土器の重要性については、柳澤(1999a:82-89, 2008:7-10)で言及し、その後、北大式以降の事例を集めて、総括的な検討を試みたことがある(柳澤2006, 2008:509-554)。
- (6) I42(「黒色砂層」)の4例と伴出した資料については、柳澤(2018a)の図7:1~11例を参照されたい。I41の2・3例は「黒色土層」より出土したものである。登録番号の41~47はベルト部分の資料と考えられ、黒色土層から床面までの遺物が含まれている。
- (7) 児玉の「モヨロ貝塚1948年編年」については、関連する部分とともに柳澤(2015:442-459)の記述を参照されたい。
- (8) 亦稚貝塚の第2ブロックには、刻紋・沈線紋土器(7)類に比定される良好な資料がまとまって出土している。その中には小片ながら、東多来加式に近似した「刻紋・沈線紋」扱いを示すものが含まれている。その要素としての由来は、系統としての十和田式の「新しい部分」に求められるであろう。
- (9) 熊木(2016)では特に30例について検討し、「北大式」の一例とする見解を披歴している。本例は、佐藤達夫が10号堅穴の西北貝塚から検出した大破片と接合したものである。佐藤は胴部の沈線紋を「擦紋系」としているが(佐藤, 1972:482)、半世紀を経てそれは誤りであり、「北大式」と鑑定されたわけである。そのとおりならば、児玉が提示した擦紋Ⅲのキメラ(折衷)土器(図9:15)も、「北大式」に比定されるのであろうか。筆者は柳澤(2008b:529-531)で30例を擦紋Ⅰ~Ⅱ期ないしⅡ期としていたが、現在では未発表資料の分析をふまえて、擦紋Ⅲ期の古い時期に位置づけている。しかし、Ⅱ期の終末段階で

ある可能性も残されており、あらためて検討の機会を持ちたい。

引用・参考文献 (五十音順)

- 石附喜三男, 1968. 擦文式土器の初現形態に関する研究. 札幌大学紀要教養部研究論集, (1): 1-44.
- 伊東信雄, 1942. 樺太先史時代土器編年試論, 喜田貞吉博士追悼記念国史論集:19-44. 大東書館.
- 上野秀一・仙庭伸久, 1993. K435 遺跡. 札幌市文化財調査報告 42. 札幌市教育委員会. 483pp, 234pp.
- 宇田川洋, 1970. '70年代擦文文化の研究. 季刊どるめん, (22): 5-16.
- 内山真澄・熊木俊朗・藤澤隆史, 2000. 香深井5遺跡発掘調査報告書(2). 礼文町教育委員会. 258pp.
- 大井晴男, 1972. 礼文島元地遺跡のオホーツク式土器について. 北方文化研究, (6): 1-36.
- 大井晴男・大場利夫編, 1976・1981. 香深井遺跡(上・下). 東京大学出版会. 774pp+134pl, 727pp+58pl.
- 大谷敏三・田村俊之, 1981. 末広遺跡における考古学的調査(上). 千歳市教育委員会. 155pp.
- 大谷敏三・田村俊之, 1982. 末広遺跡における考古学的調査(下). 千歳市教育委員会. 501pp.
- 大場利夫, 1956. モヨロ貝塚出土のオホーツク式土器. 北方文化研究報告, (11): 187-256.
- 大場利夫, 1968. 北海道周辺に見られるオホーツク文化II 礼文島・利尻島. 北方文化研究, (3): 1-44.
- 岡田淳子・梶田光明・西谷榮二ほか, 1978. 亦稚貝塚. 利尻町教育委員会. 141pp.
- 熊木俊朗, 2011. オホーツク土器と擦文土器の出会い. 今村啓爾編, 異系統土器の出会い: 175-197. 同成社.
- 熊木俊朗, 2016. モヨロ貝塚出土の続縄文土器, 第31回特別展図録 北からの文化波及: 27-32. 北海道立北方民族博物館.
- 熊木俊朗, 2018. オホーツク海南岸地域古代土器の研究. 北海道出版企画センター. 321pp.
- 越田賢一郎, 2003. 奥尻町青苗砂丘遺跡2. 北海道立埋蔵文化財センター. 105pp.
- 児玉作左衛門, 1948. モヨロ貝塚. 北海道原始文化研究会出版部. 112pp.
- 犀川会編, 1933. 北海道原始文化聚英. 民族工芸研究会. 59pp+71pl.
- 佐藤隆広, 1994. 目梨泊遺跡. 枝幸町教育委員会. 382pp.
- 佐藤達夫, 1964a. 附・モヨロ貝塚の縄文, 続縄文・及び擦文土器について. 駒井和愛編, オホーツク海沿岸・知床半島の遺跡(下): 89-96. 東京大学文学部.
- 佐藤達夫, 1964b. オホーツク遺物の特色. 駒井和愛編, オホーツク海沿岸・知床半島の遺跡(下): 89-96. 東京大学文学部.
- 佐藤達夫, 1972. 擦紋土器の変遷について. 東京大学文学部考古学研究室編, 常呂: 462-487. 東京大学文学部.
- 鈴木信, 1995. オサツ2遺跡(1)・オサツ14遺跡. 北海道埋蔵文化財センター調査報告書96. 437pp.
- 鈴木信, 1996. オサツ2遺跡(2). 北海道埋蔵文化財センター調査報告書103. 337pp.
- 塚本浩司, 2007. 石狩低地帯における擦文文化の成立過程について. 天野哲也・小野裕子編, 古代蝦夷からアイヌへ: 67-189. 吉川弘文館.
- 名取武光・大場利夫, 1964. モヨロ貝塚出土の文化遺物. 駒井和愛編, オホーツク海沿岸・知床半島の遺跡(下): 42-63. 東京大学文学部.
- 平光吾一, 1929. 千島及び弁天島出土土器片に就いて. 人類学雑誌, 44(4): 131-143, 44(5): 192-200, 44(7): 384-389.
- 藤井誠二, 2001. K39遺跡第6次調査. 札幌市文化財調査報告65(第1~5分冊). 札幌市教育委員会.
- 福沢仁之・塚本すみ子・塚本斉・池田まゆみ・岡村真・松岡裕美, 1998. 年縞堆積物を用いた白頭山ー苫小牧火山灰(B-Tm)の降灰年代の推定ー. Lagun(汽水研究), (5): 55-62.
- 前田潮・山浦清編, 1992. 北海道礼文町浜中2遺跡の発掘調査. 礼文町教育委員会. 134pp+43pl.

- 皆川洋一, 2002. 奥尻町青苗砂丘遺跡. 北海道立埋蔵文化財センター. 87pp.
- 宮宏明編, 2000. 大川遺跡における考古学的調査1—余市川改修工事に伴う1989～1994年度大川遺跡発掘調査報告書 第1分冊. 余市町教育委員会.
- 柳澤清一, 1999a. 北方編年小考, ソーメン紋土器とトビニタイ・カリカウス土器群の位置. 茨城県考古学協会誌, (11): 77-92.
- 柳澤清一, 1999b. 北方編年研究ノート—道東「オホーツク式」の編年とその周辺—. 先史考古学研究, (7): 51-99.
- 柳澤清一, 2000. 南千島から利尻島へ—道東編年と道北編年の対比—. 東邦考古, (24): 12-37.
- 柳澤清一, 2006. 北海道島・南千島における北大式～擦紋IV期の広域編年. 人文研究, (35): 43-115.
- 柳澤清一, 2008. 北方考古学の新地平—北海道島・環オホーツク海域における編年体系の見直し—. 六一書房. 651pp.
- 柳澤清一, 2009. 擦紋II期における道央・道北・サハリン島南部編年の対比. 人文研究, (38): 99-140.
- 柳澤清一, 2010. 擦紋III期における環宗谷海峡編年検討. 菊池徹夫編, 比較考古学の新地平: 784-794. 同成社.
- 柳澤清一, 2011. 北方考古学の新展開. 六一書房. 400pp.
- 柳澤清一, 2012. いわゆる「元地式」(「接触様式」)編年の再検討. 古代, (128): 113-160.
- 柳澤清一, 2013. 礼文島浜中2遺跡(1990年度)調査資料の編年. 古代, (131): 143-184.
- 柳澤清一, 2015. 北方考古学の新潮流—「逆転編年」説の検証と「オホーツク文化」年代観の改訂—. 六一書房. 626pp.
- 柳澤清一, 2017. 礼文・利尻島編年の新検討—その(1)香深井5遺跡を中心として—. 利尻研究, (36): 47-71.
- 柳澤清一, 2018a. 礼文・利尻島編年の新検討—その(2)亦稚貝塚資料から(1)—. 利尻研究, (37): 57-82.
- 柳澤清一, 2018b. 亦稚貝塚出土の土器資料 その(1)I区. 北海道利尻富士町沼浦海水浴場遺跡(第2

次)・沼浦遺跡(第1次)発掘調査報告書. 礼文・利尻島遺跡調査の会. 200pp.

山内清男・佐藤達夫, 1964. 日本先史時代概説, 日本原始美術1. 講談社. 220pp.

礼文・利尻島遺跡調査の会, 2017. 北海道利尻富士町沼浦海水浴場遺跡第一次発掘調査報告書. 151pp.

礼文・利尻島遺跡調査の会, 2018. 北海道利尻富士町沼浦海水浴場遺跡(第2次)・沼浦遺跡(第1次)発掘調査報告書. 200pp.

図版出典

図2. 1～21: 熊木(2018)・塚本(2007), 22～26・28～31: 大井・大場編(1976), 27: 筆者実測(2007年実査).

図3. 1: 柳澤(2017: 第5図)・(2018a: 第6・7図)より編成(1～4: 筆者実測, 2015-2017年), 5～10: 岡田・梶田・西谷ほか(1978), 11～14: 上野・仙庭(1993).

図4. 1・2: 大谷・田村(1982), 3: 石附(1968), 4: 大谷・田村(1981), 5: 宮編(2000), 6: 鈴木(1996), 7: 藤井(2001), 8・9: 鈴木(1995).

図5. 1～4: 礼文・利尻島遺跡調査の会(2018).

図6. 1・5～8: 礼文・利尻島遺跡調査の会(2017), 2～4: 柳澤(2018b).

図7. 1～6: 礼文・利尻島遺跡調査の会(2018).

図8. 1～10: 児玉(1948), 11～17: 名取・大場(1964).

図8については柳澤(2015)第260図より転載.

図9. 1～3・5・10・11: 礼文・利尻島遺跡調査の会(2017), 4・6・7～9: 礼文・利尻島遺跡調査の会(2018), 12～18: 児玉(1948), 19～26: 名取・大場(1964).

図10. 1～4: 皆川(2002), 5～11: 越田(2003), 12・14～16: 礼文・利尻島遺跡調査の会(2018), 13・17～19: 礼文・利尻島遺跡調査の会(2017), 20～24・27: 岡田・梶田・西谷ほか(1978), 25: 筆者実測, 26: 犀川会編(1933), 28～30: 佐藤(1964b), 31: 児玉(1948), 32～35: 名取・大場(1964).